

芦屋大学論叢 第82号  
(令和6年7月29日)抜刷

《研究ノート》

児童一人一人の読みの確立を目指した  
文学的文章の学習指導における一考察

—『ごんぎつね』の授業実践から—

塩家崇生



## 《研究ノート》

# 児童一人一人の読みの確立を目指した 文学的文章の学習指導における一考察 —『ごんぎつね』の授業実践から—

塩家崇生  
兵庫県伊丹市立鴻池小学校 主幹教諭  
(芦屋大学臨床教育学部非常勤講師)

### 1. 問題の所在

小学校国語科の「読むこと」領域における課題として、令和5年度全国学力・学習状況調査の報告書<sup>1)</sup>では「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけること」、また「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること」、また令和4年度の同調査報告書<sup>2)</sup>では「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることで自分の考えを明らかにしていくこと」を挙げている。両報告書ともに「自分の考え」という言葉が共通しており、いかに児童一人一人に自分の考えを持たせられるかが重要な課題の一つであることが伺える。そのためには、内閣府(2022)「society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（案）」<sup>3)</sup>でも指摘している一斉授業や形式的平等主義といった一律一様の教育から個別最適な学びと協働的な学びのある多様性を重視した教育への転換を図る必要がある。従来の授業者が問い合わせを出し、それを学級全員で話し合い教材理解に努めていく授業から児童一人一人に問い合わせを持ち、それについて探究できる授業を目指したい。ただし、授業者は児童に委ねるだけではなく学習目標が達成できるために児童一人一人の実態に応じて既習事項や既存の知識等と結び付けたり、教材における内容面及び表現面に意識させたりすること等の指導及び支援等が必要となる。

筆者は児童一人一人の読みの確立を目指した文学的文章の学習指導をテーマとして2023年4月からA県B市立C小学校第4学年（3学級）92名児童を対象に研究<sup>4)</sup>を行っている。本稿ではこれまでの研究結果を踏まえ同年9月から10月にかけて行った『ごんぎつね』の授業実践とそれに関連した児童意識調査の結果からその成果と課題を明らかにする。

### 2. 研究方法

#### 2.1 これまでの研究について

本研究では文学的文章の学習指導を通して児童が主体性を發揮し児童一人一人の読みの確立、そしてそれをより深めようとする資質・能力を育成することを目指している。そこで筆者を含む授業者3名が各担当学級で2023年4月から『白いぼうし』、6月からの『一つの花』の授業を通して児童に「問い合わせ」を持たせるように指導を行ってきた。また、児童には授業後の振り返り記述で思ったこと、感じたこと、考えてみたいこと、疑問に思ったこと等を記述するように指導を行い、自らの学びについて自覚を促した。また、児童の振り返り記述内容について授業者が学級全体に紹介したり、グループ活動や学級全体での交流をしたりする

等を通して学級内に埋没している「問い合わせ」を浮上させ、多様な視点から主体的に探究を行おうとする児童の育成にあたってきた。他にも、一斉授業や形式的平等主義といった一律一様の教育から個別最適な学びと協働的な学びのある多様性を重視した教育への転換を目指すため、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るための取り組みについて整理した。(表1)

表1 本研究における「個別最適な学び」と「協働的な学び」についての取り組み

個別最適な学び		協働的な学び
指導の個別化	学習の個性化	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童一人一人の特性や学習進度に応じた学習時間の設定</li> <li>・児童一人一人の学びに応じた個別の指導・支援</li> </ul> <p>&lt;本研究での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 一人で学びを自覚する時間の確保（振り返りを授業の終末+宿題）</li> <li>→ 児童一人一人に対し行う振り返りの内容における指導と評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の「問い合わせ」を児童一人一人が設定できるような支援</li> <li>・児童一人一人が自分の学習方法を選択できるような支援</li> </ul> <p>&lt;本研究での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 振り返りの共有を通して児童一人一人の探究のきっかけとなる多様な「問い合わせ」を知る機会の創出</li> <li>→ 多様な学び方支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分とは違った考え方や見方をもった他者との対話を通して多様な考え方方が組み合わさり、よりよい学びを生み出すことができる活動の創出</li> </ul> <p>&lt;本研究での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ グループ活動のより充実した話し合い活動に向けた機会の創出</li> <li>→ グループ活動の内容に関する指導と評価</li> </ul>

対象児童は本研究当初から第一次で学級全体で登場人物や場面確認、初読後の感想や「問い合わせ」の共有を通して読みの土台づくりを行い、第二次では自分の読みを問い合わせたり、理解し直したり、表現し直したりできるようにグループ活動や全体学びをしている。また第三次では個々で決めたテーマについて考察文を書く活動を行っている。

これまでの本研究における個別最適な学びの成果として、児童の振り返り記述量が増えたことが挙げられる。課題改善にむけて4つの視点「授業前の意識」、「授業中の発見」、「授業中の納得（または疑問）」、「これから意欲」を示したこと、児童が学習の主題や内容、活動等に対して具体的な振り返り記述ができるよう意識付けていったことがこの結果につながったと考えている。しかし、これが他教材または他教科等でも活かされているのかについては継続して調査していく必要がある。また、協働的な学びの成果として多くの児童の「問い合わせ」に対する交流や探究活動において好意的に感じていたことが挙げられる。しかしながら授業者視点から見ると活動の内容面で課題が残っており、本実践ではグループ学習の充実に向けた質的改善を図っていく。

## 2.2 本実践における「問い合わせ」とその分類について

本実践でもこれまでの授業展開と同様、第一次で学級全体で読みの土台づくり、第二次でグループや全体での対話における探究活動、第三次で個々のテーマにおける考察を行う。また、振り返り指導においても4つの視点を明示した振り返り指導を引き続き行い、その定着を図っていく。また、前述した協働的な学びにおける課題については児童の「問い合わせ」を活かした対話の充実を図ることでその改善にあたっていく。対話における「問い合わせ」について白石範孝<sup>5)</sup>は考える内容や活動で目指すことについて明確にすることで児童の主体性を生み、対話の内容も論理的にできることを述べていることから、授業者は児童の「問い合わせ」を適切に活かし、協働的な学びに対する必然性を生み出すことが重要だと考えた。そのためにはまず授業者が児童から出てきた「問い合わせ」について理解しておく必要がある。そこで出てきた「問い合わせ」を適切に意味づけたり価値づけしたりできるように分類図を作成した。(図1)

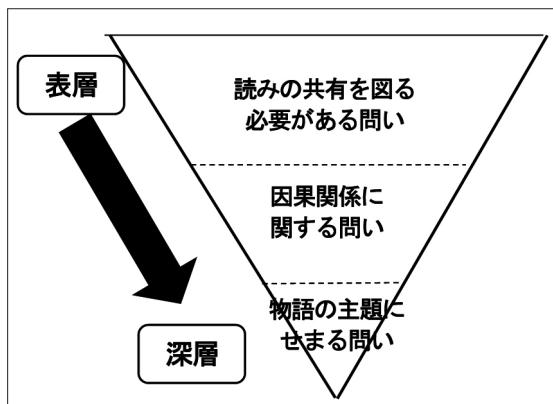


図1 分類図

授業者は児童の「問い合わせ」を大きく「読みの共有を図る必要がある問い合わせ」、「因果関係に関する問い合わせ」、「作品の主題にせまる問い合わせ」の3つに分類していく。「読みの共有を図る必要がある問い合わせ」は、主に初読の感想文の内容や初期段階に出てきた物語の基本構成（設定、人物、状況等）に関する「問い合わせ」等を用いて第一次に読みの土台づくりに活かしていく。「因果関係に関する問い合わせ」については本文中に出てくる言葉の表現からその状況や様子、登場人物の心情またはその変化等を考える手がかりになる「問い合わせ」として主に第二次の各授業

導入時に児童へ示していく。これにより、協働的な学びで考える「問い合わせ」の必然性を児童に対して明確に示すことができる。また、授業者の評価を示すことで児童が物語を読むことを通して出てきた「問い合わせ」に対して感覚的だけではなく、作品やそこにある一つ一つの言葉や文、文章から論理的に読んで解決を図ろうとする意識を高められるのではないかと考えている。

なお、授業者は児童が協働的な学びを行っている時の状況について適切に把握するために特定された児童の考え方だけの発表の場となっていないか、また話し合ってはいるが内容が教材の状況理解のみに終わっていたりする等の活動に陥っていないか等を確認していく。児童が学級全体やグループ等で級友と話したり聞き合ったりする中で自分とは異なる読みの存在に気づくことができたか、また新たな読みと出会ったのかという視点を授業者が意識し、必要に応じて支援を行っていくことが重要となる。さらに「作品の主題にせまる問い合わせ」からは物語の主題や作者の想いを裏付ける文体や文脈、または伏線等の表現方法から生まれた児童一人一人の読みをさらに深める「問い合わせ」である。ここで出てきた「問い合わせ」は第三次の児童自身が考察していくテーマとなっていく。

### 2.3 本実践における「深い学び」の実現に向けた手立てについて

学習活動を行うことのみが目的にならないように「深い学び」の実現に向けた手立てについても言及しておく。樺山敏郎<sup>6)</sup>は「深い（深まっていく）学び」を実現するために、量的かつ質的な側面を意識すること、またその過程と結果に注目できる学びの全体像をつかませることの重要性を説き、その全体像を山に見立ててデザインをした単元の構想図を提案している。

本実践ではそれを参考にした上で学級の実態に応じて学習プラン（図2）を作成した。児童とそれについて共有を図ることで、「深い（深まっていく）学び」に対する意識の向上を図った。また学びの全体像を示すことで児童一人一人が見通しを持って「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」を考える機会とした。

### 2.4 『ごんぎつね』の授業計画とその実践

対象者：A県B市立C小学校第4学年（3学級）92名児童及び担任3名（内1名は筆者）

実施：2023年9月～10月

内容：授業の実施（全12時間）

第一次 学級全体で読みの土台づくり（第1～3時）

第二次 教材の確認及び問い合わせの検討（第4～9時）

第三次 自分の立てたテーマにおける考察文の作成及び交流（第10時～第12時）

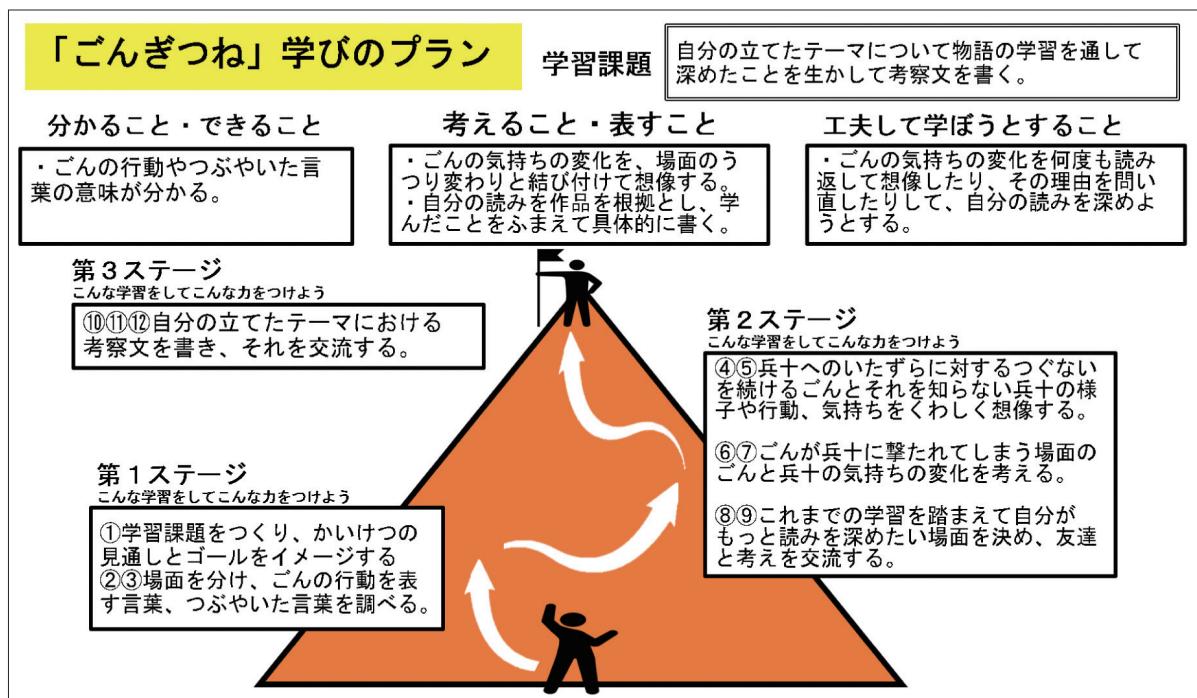


図2 A学級の『ごんぎつね』学びのプラン

## 2.5 児童意識調査

『ごんぎつね』の学習後に個別最適な学び（学習の個性化）に関する質問6項目及び協働的な学びに関する質問2項目を5件法で行う意識調査（表2）を行い、7月に実施した同内容の調査結果との比較を行う。なお、本調査における5件法の調査は「とても思う（5点）」、「まあまあ（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「あまり思わない（2点）」、「全く思わない（1点）」の回答形式を取っており、「とても思う」、「まあまあ」を選択した児童を好意群、「あまり思わない」、「全く思わない」を選んだ児童を非好意群とする。また『ごんぎつね』の学習後のみ自身の読みを深めるのに役に立ったと感じた授業方法について意識調査（表3）を行った。なお、本調査は複数選択可とする。

表2 4月と7月に実施する児童意識調査（5件法）

質問内容	
学習の個性化	ア 物語の本文やさし絵などからイメージしたことを辞書やインターネット検索、動作化等から自分で選んで考え、物語を読み深めていくことは好きですか
	イ 疑問に思ったことや気になったこと等から自分なりの「問い合わせ」を立てることができましたか
	ウ 振り返りは、授業が始まる前の意識、授業中の発見、納得、今後の意欲を意識して書くことができましたか
	エ 振り返りは4月に比べて授業で学んだことや友達の意見から考えたこと、自分が考えたこと等について書けるようになりましたか
	オ 友達の振り返りを知ることで、新しい問い合わせが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか
	カ 自分が興味を持ったテーマについて、学習の最後に考察するのは好きですか
協働的な学び	キ グループ学習で友達の考えを知ることで、新しい問い合わせが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか
	ク グループ学習やワールドカフェで友達と交流をすることは、物語を読み深めていくきっかけとなりましたか

表3 児童が読みを深めることについて役立ったと感じた授業方法についての意識調査

学びの種類	質問項目
学習の個性化	言葉の意味を辞書で調べた時
	言葉のイメージをインターネットで調べた時
協働的な学び	友達の考えを聞いた（知った）時
	学級全員で考えた時
	授業の振り返りを書いている時
	グループ学習や全体学習で自分の考えを発表している時

### 3. 結果

#### 3.1 『ごんぎつね』の実践

##### 3.1.1 第一次の学習指導について

本教材は、語り手がひとりぼっちのきつね、ごんの行動や心情の変化が詳しく語り進める物語である。初読後の感想では自分のいたずらが兵十の母親の死に関係していると感じたごんが兵十に対して償いをしようと努力するが最後の場面で兵十に撃たれてしまう場面に関して、「かわいそう」、「悲しい」等といった感想が多く出てきた。他にもいたずら好きのきつねという印象から「なぜいたずらをしたのか」、「なぜいたずらをやめたのか」といった問い合わせや「ごんは人間にうらみがあるのではないか」、「ごんが撃たれたのは自業自得だ」、「兵十もそこまでしなくてもよかつたのではないか」といを感じている児童もいた。それらを第一次で学級全体で共有を図った。また、授業を展開していく中で児童が深まっていく学びの自覚を図るため初読後の感想や問い合わせを教室内に掲示した場面設定については第6章の8つの場面に分けられた物語として児童と確認している。視点については、1章から5章までが「ごん視点」、6章だけが「兵十視点」となっている。この視点の転換については学習の初期段階で児童に理解させておく必要があると考え、第一次で全体で共有を図った。また、児童が考えを持つ際、「ごん視点」と「兵十視点」の二つの視点が混在しないよう主語を明確にするよう指導した。

##### 3.1.2 第二次の学習指導について

第二次では第一次で共有を図ったことを踏まえ、児童から出てきた複数の問い合わせについてグループで選択し、探究活動を行った。探究活動後には児童は振り返り記述を行い、その内容について授業者が評価を行う。それを次の授業の導入で授業者が意味づけたり価値づけたりしながら全体での共有を図った。物語は様々な出来事を通して人物の変容を描いている。学習指導要領<sup>7)</sup>では構成や叙述などに基づいて文章の内容や形式について精査・解釈することと示しており、物語の変容について文章の内容や形式に着目して読むこと、目的に応じて必要な情報を見つけること、書かれていることを手がかりにして想像していくことが必要となる。授業者は児童が探究活動を行っている際、児童が物語を根拠として探究活動に取り組めているのかに注目し学習状況を確認していった。また、探究活動後の振り返り記述内容を学級全体で共有しながら「問い合わせ」の整理を行った。（表4）

なお、振り返り記述については児童の取組状況を鑑みた上で一人一人の学びを自覚する時間の確保を理由に家庭学習（宿題）とした。また振り返りについては、授業者がその内容を確認やそれを共有する資料の作成時間を考慮し、2時間分の授業に対して1回とした。本実践では全12時間中、振り返り課題は5回行った。授業展開例としてA学級が2023年10月10日に授業を行う前に作成した2時間分（第6時、第7時）の学習指導案を表5に示しておく。

表4 第二次における児童の主な問い合わせとその反応及び授業者の分類

章	場面	視点	問い合わせの内容	共有時の児童の反応	授業者の分類
3	ごんがくりや松たけを置く場面	ごん	なぜごんは兵十の家に何回もくりや松たけを置いたのだろう	・ごんの目的がいたずらからつぐないに変わった ・置く場所や置き方の違いがある	因果関係に関する問い合わせ
		兵十	兵十はもらったくりや松たけをどうしたのか	・誰が置いたものかわからないから気味悪い ・兵十にとっては迷惑品	因果関係に関する問い合わせ
5	ごんが兵十達について行った場面	ごん	兵十達の話を聞いてごんは「こいつはつまらないな」と思っているのになぜ明くる日もくりを持っていたのだろう	・ごんの目的がつぐないから別のものに変わっていないか	因果関係に関する問い合わせ
6	ごんが兵十に撃たれる場面	ごん	ごんはお礼を言ってほしかったのか	・ごんはつぐないの意味を理解しているのか ・ごんは人間の常識が分かっていないのではないか	因果関係に関する問い合わせ
		ごん	ごんが撃たれたあと、どう思っていたのだろう	・気づいてくれてうれしい ・撃たれたことで自分の悪事を自覚した ・生きたかったことに対する悲しみ ・なぜ撃たれてしまったのか疑問	物語の主題にせまる問い合わせ
		ごん	ごんは、兵十に撃たれる(殺される)と思っていたのだろうか	・思っていなかった ・思っていた	因果関係に関する問い合わせ
		兵十	兵十はごんのことをどう思っていたのだろう (撃つ前と撃った後)	【撃つ前】 ・憎しみ ・許さない 【撃った後】 ・撃つことに対する後悔 ・撃つことに対する謝罪 ・ごんがくりを持ってきたことに対する疑問	因果関係に関する問い合わせ
6 後	本文には書かれていないあとはなし	ごん	撃たれたあとは、どうなったのだろう	・死んでいると答えている児童が多い	因果関係に関する問い合わせ
		ごん	撃たれたあとは生きているのか。死んでいるのか	・死んでいると答えている児童が多い	因果関係に関する問い合わせ
		兵十	兵十はごんにお礼を言つたのだろうか	・児童の読みに違いがあり、意見が分かれた	因果関係に関する問い合わせ
全体	物語全体に関する問い合わせ	ごん	この話は悲しい話なのか (違うならどのような話なのか)	・悲しい話だけだとは言えない	物語の主題にせまる問い合わせ
		ごん	ごんは人間からどう思われているのか理解していたのだろうか	・理解できていなかったのではないか	物語の主題にせまる問い合わせ
		構成	なぜ、数日間の話なのに、こんなに語り継がれる話になったのか	・なぜだろう ・不思議	物語の主題にせまる問い合わせ
		語り手	どうして作者は第1章から5章までがごん視点で第6章は兵十視点にしたのだろうか	・なぜだろう ・確かにそうだ	物語の主題にせまる問い合わせ

表5 A学級における第6時、第7時の学習指導案(一部抜粋)

	学習活動	主なる発問と予測される児童の反応	指導上の留意点
導入1 5分	前時を ふりかえる	<b>★前時のふりかえりの一部を紹介する</b> 既習事項や指導事項、新たな視点等に関係する内容について児童の振り返り記述から共有を図る	探究活動に向けた方向付けを行う
展開1 35分	・音読  ・ホーム グループでの 探究活動 (15分) ↓ ・ワールド カフェ交流 (15分)  ・ホーム グループでの 報告活動 (5分)	<p><b>ごんが兵十に撃たれてしまう場面のごんと兵十の気持ちに着目する</b></p> <p>ごんが兵十に撃たれてしまう場面（6場面）の音読</p> <p><b>★各グループで本時の探究する問い合わせ確認する</b></p> <p>&lt;探究する問い合わせ（10月3日のA学級児童からの問い合わせ）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後の兵十がうつた場面、その時のごんと兵十はどのような気持ちだったのだろう</li> <li>・兵十はごんのことをどう思っていたのだろう</li> <li>・兵十はうつたあと、ごんをどうしたのだろう</li> <li>・ごんは兵十にうつされたあと、うなずいているからその時はまだ生きているということだから、そのあとはどうなったのだろう</li> <li>・兵十はごんにお礼を言ったのだろうか</li> <li>・ごんは死んでいるのか。それとも生きているのか</li> </ul> <p>&lt;予想される児童の活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の本文や調べた情報等を手がかりに話し合う</li> <li>・国語辞典で言葉の意味を調べる</li> <li>・ホワイトボードを使って考えを整理する</li> <li>・タブレット端末を用いて、紹介された振り返りを読んだり、言葉のイメージを調べたりする</li> </ul> <p><b>★各グループの探究活動について交流する</b></p> <p>&lt;予想される児童の活動例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループで行われている探究活動について発表している</li> <li>・ホームグループと他グループの探究活動内容について比較をしている</li> <li>・それぞれの探究活動の内容についてつながりを見つけようとしている</li> <li>・探究活動について感想や疑問に感じたことを伝えている</li> </ul>	<p>○評価基準 A：中心人物や重要人物等の気持ちの変化や性格、情景等について感想や問い合わせを持ち、教材文や言葉の意味、表現等を基に根拠や理由を挙げて説明することができる</p> <p>B：様子や行動、気持ちや性格等を表す語句に注目し、問い合わせに対して解決する手がかりを見つけている</p> <p>Cへの支援 授業者が児童に対して教材文の言葉や挿絵等から内容について理解や、考えたことの整理等に関する支援を行っていく</p> <p>○交流するための最適な場の設定 ・他グループの探究活動から得られた見方・考え方から改めて自身または自グループでの探究活動の「問い合わせ」、「理解し直し」、「表現し直し」ができる場づくりを児童の実態に応じて適切に行う</p>
説明 5分	次時についての説明をする	次の授業についての見通しを持たせる	
導入2 5分	前時の確認	<b>★前時の探究活動の内容について確認する</b> ごんが兵十に撃たれてしまう場面（6場面）の音読	○児童自身が行う考察の内容について全体で確認する
展開2 35分	児童の実態に応じて全体交流やグループ、もしくは近くの友達との交流等を行う	<p><b>★自身の考え方と他者の考え方を比べる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体でこれまでに出てきた問い合わせについて考え方を交流する。</li> <li>・友達との考え方を自身の考え方と比べたりつなげたりしながら読みを深めていく</li> </ul> <p>&lt;前時の学習で予想される問い合わせ&gt;</p> <p>●ごん視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・撃たれた後のごんはどのような気持ちだったのか</li> <li>・兵十の言葉にうなずいた時のごんはどのような気持ちだったのか</li> <li>・ごんは危ないのになぜ家の中まで入ったのか</li> <li>・ごんは悲しい終わり方だったのか</li> <li>・ごんにとってこの終わり方はよかったですのか</li> </ul> <p>●兵十視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごんを撃つためにじゅうを構える兵十はどのような気持ちだったのか</li> <li>・ごんを撃った後の兵十はどのような気持ちだったのか</li> <li>・「ごん、おまいだったのか…」と言った時の兵十はどのような気持ちだったのだろう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分だけの独創的で興味深い考え方、内容になっており、読み手に気付きをもたらしているか</li> <li>・作品を根拠としており読む人が納得できる考え方、内容になっているか、また具体的であるか</li> </ul>

		<p>●語り手視点 ・なぜ、この場面だけごん視点ではなく兵十視点なのか ●火縄じゅう ・「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました」という表現は何を表しているのか ・「けむり」を「青い」と表現しているのはなぜだろう</p>	
まとめ 5分	本時のまとめ	本時で出てきた児童の考えを整理していく	
振り返り 宿題	2時間分の学習における振り返りをする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本活動について自身の学びを実感する時間とする &lt;予想される振り返り例&gt;</li> <li>・はじめは〇〇だと思っていたけれど…（具体的な内容）をすることでおもわかった。</li> <li>・今日は（探究活動内容）を通して、新たなイメージを持つことができた。</li> <li>・今日は（探究活動内容）について考えたけれど、まだ解決できなかった</li> <li>・〇〇さんの（具体的な内容）について納得できた</li> <li>・〇〇さんの（具体的な内容）をきいて自分の考えが変わった</li> <li>・○グループの（探究活動内容）の話を聞いて、そのようなことを考えたことがなかったので…</li> <li>・これからも、今日解決できなかつたことを考えていく</li> </ul>	<p>ふりかえりの4つの視点を意識させる            ①はじめの意識            ②授業中の発見            ③授業中の納得            ④これからの意欲</p>

第7時では3学級ともごんが兵十に撃たれてしまう場面のごんと兵十の気持ちを考えることを中心に行なったが、読みを深めるための手がかりとする言葉や文章表現等については学級間に違いが出た。A学級では撃たれる前と撃たれた後の変化について兵十の言葉を手がかりに考えようとしたことに対し、B学級では語り手の言葉（情景）を手がかりにして撃たれた場面に児童が注目し、二者の気持ちの変容を考える授業展開となった。C学級では撃たれたごんのうなずいた行動に着目しその心情とそれを見た兵十の気持ちを考えていた。

授業者は児童の実態を見極め、児童の主体性を育ませるためのファシリテーターとなるよう心がけて授業を展開した。また学習状況に応じてノートと端末、また黒板と電子黒板といったアナログとデジタル機器の併用を行いながら、教室内に存在する問いや考え方等を児童が視覚的に理解できるようにした。

### 3.1.3 第三次における探究テーマの選択とその記述及び発表について

第三次では児童が学級で生まれた探究テーマ（表6）から一つを選択し、考察文を書いていく。授業者は児童に対して自分なりの考察について根拠を持って説明できること、またそれが聞き手にも納得できる考えであることに意識するように指導を行っている。なお、各学級の児童から出てきたテーマは大きく「ごんに関すること」、「兵十に関すること」、また本文には記述されていない「あとばなしに関すること」の3つに分かれた。主な探究テーマについて表6で示す。

児童は自分が書いた考察文の内容についてグループ活動を通して交流した。また学級全体では希望した児童の考察発表とそれに対する質疑応答を行った。

表6 児童の主な探究テーマ内容

	主な探究テーマ内容
ごんに関すること	<p>全文を通して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごんは人間からどう思われているのか理解していたのか</li> <li>・ごんはお礼を言ってほしかったのか</li> <li>・ごんの心（根元の部分）はこの数日間で変わったのか</li> </ul> <p>第3章～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜごんは兵十の家に何回もくりや松たけを置いたのだろう</li> </ul> <p>第4章～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兵十たちの話を聞いて「こいつはつまらないな」と思っているのになぜ明くる日もくりを持って行ったのだろう</li> </ul> <p>第6章</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごんは撃たれる（殺される）と思っていたのか</li> <li>・ごんは死ぬことを覚悟していたのか</li> </ul>
兵十に関すること	<p>第3章～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家に置かれていたくりや松たけを兵十はどうしたのだろう</li> <li>・どうして第6章だけ語り手は兵十視点なのだろうか</li> </ul> <p>第6章</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごんを撃つ前、撃った時、撃った後、それぞれどう思っていたのだろうか</li> <li>・ごんのつぐないの気持ちは兵十に伝わったのか</li> </ul>
あとばなしに関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作者は読者に伝えたかったことはなんだろう</li> <li>・この物語はごんが数日間すごしたお話なのにどうして語り継がれるようになったのか</li> <li>・撃たれた後のごんと兵十の後悔について考える</li> <li>・ごんは兵十に撃たれた後、どうなったのか</li> <li>・兵十はごんを撃った後、ごんをどうしたのか</li> </ul>

### 3.2 児童を対象とした意識調査の実施

#### 3.2.1 本実施前後の児童意識調査の比較

『一つの花』の学習後（7月）と『ごんぎつね』の学習後（10月）に実施した児童意識調査の結果（表7）では「ふりかえりは、授業が始まる前の意識、授業中の発見、納得、今後の意欲を意識して書くことができましたか」、「ふりかえりは4月に比べて授業で学んだことや友達の意見から考えたこと、自分が考えたこと等について書けるようになりましたか」では7月、10月ともに好意群（5つの選択肢から「とても思う」、「まあまあ」を選択した児童）が約7～8割を占めており、振り返り記述の方法として約7～8割の児童には一定の定着が図れたのではないかと考える。しかし、まだ個々に指導及び支援が必要な児童がいることは否めない。そのような児童が振り返り記述で自らの学びを自覚できるような個別指導及び支援、また授業の工夫を行っていく必要がある。

また、「問い合わせ」を持たせる授業に関する調査については友達の振り返り記述内容やグループ学習での交流から新たな「問い合わせ」が生まれたり新たな視点が得られたりすると約7～8割の児童が回答している一方、「疑問に思ったことや気になったこと等から自分なりの問い合わせができましたか」では好意群が7月の70.9%からの上昇が見られなかった。

#### 3.2.2 読みを深めることに関する児童意識調査の結果

『ごんぎつね』の学習後（10月）に本実践において児童が読みを深めることについて役立ったと感じた授業方法を6項目から複数選択する調査を行った。結果は表8である。一番多くを占めたのが、「友達の考えを聞いた時」で全体の7割を占めており、その次に多かったのが「学級全員で考えた時」（60.5%）であったことがわかった。学習の個性化にあたる「言葉の意味調べ」、指導の個性化にあたる「授業の振り返り」に関しては全体の約5割に留まった。

表7 児童意識調査内容とその結果

	質問内容		一つの花	ごんぎつね
学習の個性化	物語の本文やさし絵などからイメージしたことを辞書やインターネット検索、動作化等から自分で選んで考え、物語を読み深めていくことは好きですか	好意群	74.7%	72.9%
		非好意群	8.0%	9.4%
	疑問に思ったことや気になったこと等から自分なりの「問い合わせ」を立てることができましたか	好意群	70.9%	69.4%
		非好意群	7.0%	9.4%
	振り返りは、授業が始まる前の意識、授業中の発見、納得、今後の意欲を意識して書くことができましたか	好意群	77.9%	78.8%
		非好意群	5.8%	4.7%
	振り返りは4月に比べて授業で学んだことや友達の意見から考えたこと、自分が考えたこと等について書けるようになりましたか	好意群	86.0%	88.2%
		非好意群	4.7%	3.5%
	友達の振り返りを知ることで、新しい問い合わせが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか	好意群	80.5%	81.2%
		非好意群	3.4%	4.7%
な協働的	自分が興味を持ったテーマについて、学習の最後に考察するのは好きですか	好意群	78.4%	76.5%
		非好意群	9.1%	12.9%
	グループ学習で友達の考えを知ることで、新しい問い合わせが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか	好意群	86.0%	81.2%
		非好意群	2.3%	4.7%
	グループ学習やワールドカフェで友達と交流をすることは、物語を読み深めていくきっかけとなりましたか	好意群	83.0%	87.1%
		非好意群	6.8%	7.1%

表8 読みを深めることについて児童が役立ったと感じた授業方法とその結果

順	質問項目	学びの種類	支持率 (%)
1	友達の考えを聞いた（知った）時	協働的な学び	70.9
2	学級全員で考えた時	協働的な学び	60.5
3	言葉の意味を辞書で調べた時	学習の個性化	55.8
4	授業の振り返りを書いている時	指導の個別化	54.7
5	言葉のイメージをインターネットで調べた時	学習の個性化	37.2
6	グループ学習や全体学習で自分の考えを発表している時	協働的な学び	33.7

#### 4. 考察

本研究は小学4年生を対象に1年間の文学的文章における学習指導を通して、児童一人一人が主体性をもって自身の読みを確立することと読みを深める資質・能力の育成を目的として進めており、本実践は本研究における中間評価という位置づけである。本稿ではこれまでの研究と同様に行った授業展開と、これまでの研究結果から質的改善を図った授業者の指導及び支援の2つの観点から考察を行っていく。

##### 4.1 授業展開から見られた成果と課題

授業展開については、これまでの実践と同様、第一次では児童一人一人の読みの土台づくりとして作品の構造と内容の把握を学級全体で行った。A学級の児童は『ごんぎつね』の場面分けを行う際、「時間」を意識して行っていた中で本作品はどのぐらいの期間の物語なのかという「問い合わせ」が生まれ、それを学級全体で考えた。本文の言葉「十日ほどたって…」や「次の日には…」、「その明くる日も…」等といった言葉を手がかりにし、ごんと兵十の物語が一ヶ月以内であることに気づくことができた。

これらの学習活動を通して、児童は作品の言葉や文章表現等を根拠として自他の問い合わせを解決していくことの必然性に気づかせることができたと考える。一人一人の読みを確立する前提として物語を根拠とすること

を意識させるといった観点からも第一次に学級全体で問い合わせの解決をする過程は必要といえるだろう。

第二次では協働的な学びにおける質的改善に取り組んだ。児童の学習状況の把握については特に児童の振り返り記述に重点を置き、そこから出てきた「問い合わせ」に対して3つに分類し意味づけたり価値づけたりしたものを学級全体に示したことで学級に埋もれた「問い合わせ」を浮上させられることができた。また、それを活かすことで児童は読みの視点を広げることができたと考える。また、グループで「問い合わせ」について探究している活動では、授業者は児童たちが話し合っている言葉に注目し、それが物語を根拠としているか、またそれを聞いた人が納得できる考え、または内容になっているか、さらにはより具体的であるか等の確認を行い、その状況に応じた指導及び支援を行った。これらを通して児童が「深まっている」こと、またそれがさらに自身の読みを「深めた」ことを自覚できるよい機会となったと考えている。今後も引き続き児童及び活動グループの学習状況を適切に見取ることを意識し、それを活かした指導及び支援に努めていく。

第三次の個々で決めたテーマについて考察文についての児童意識調査「自分が興味を持ったテーマについて、学習の最後に考察するのは好きですか」では、好意群は前回と大きく変化がみられなかつたが非好意群が微増した結果となつた。本実践では学級で出てきた探究テーマの中から選択し、考察文を書く活動であったが、児童によってはテーマを限定されたことで「選びたいテーマ」ではなく「選ばなければいけないテーマ」という意識になってしまい、主体的な自分の読みの探究活動に至らなかつた児童もいたのではないかと考える。一人一人の読みの確立を目指した本研究ではあったが、この結果から第三次の学習活動について見直しを図っていく必要がある。

#### 4.2 授業者の指導及び支援から見た成果と課題

本研究は年間を通して3学級の児童を対象に行っているが、各学級での児童の注目する言葉や文章表現、児童が発言する内容、授業進度等に違いがあった。むしろそれが自然であると筆者は考えている。各担任は児童の実態を授業者が適切に見極めた上でアドバイザーやサポートー、デザイナー、コーディネーターやファシリテーターとその役割を変えながら指導書通りの授業ではない一期一会の授業を目指した。そのために学級内に存在する多様な読みを埋没させることの無いように学級掲示を工夫したり端末を活用したりして可視化させてきた。児童意識調査では他者の考えを知った時が自身の読みを深めるのに役立つを得ている児童が全体の約7割、また他者の振り返りから新たな問い合わせや新たな視点の獲得に繋がったと感じている児童が全体の8割を占めたことが明らかとなった。この結果から多くの児童が他者の読みを知りたいと感じており、自身の読みを精査・解釈する学習過程の中で考え方を可視化させていくことは有効であったと考える。

##### 4.2.1 振り返り記述について

筆者は振り返り記述については研究当初から4つの視点を意識した指導及び支援を行ってきたことにより、児童の記述内容に関する改善は図れていると児童の実態から感じている。しかし、児童が読みを深めることについて役立つと感じた授業方法に関する児童意識調査の結果では「深い学び」と関連づけている児童が全体の約半数となっており、多いとはいえない。本来、書くことは個別的な表現活動であり、その活動を通して自身の読みを問い合わせたり、理解し直したり、表現し直したりして深めることができるものである。ともすれば、振り返りをすることを通して自身で学びを「深めている」ということに気づいていない児童が存在している可能性も考えられる。このことから振り返り記述と個人の学びにおける自覚については今後の検討課題とする。

#### 4.2.2 児童の「問い合わせ」とそれを活かした授業改善について

本研究では学級内に存在する「問い合わせ」について探究する活動をグループで行ってきた。その実践を通して多くの児童が「他者の考えを聞くことで自身の読みを深めるのに役に立っている」と感じていることが児童意識調査結果から分かった。また、既習事項を生かしながら主体性を持って探究活動に取り組むグループも多く見られた。しかしながら、自ら「問い合わせ」を立てる学習活動ではその内容に個人差が生れた。また、児童意識調査でも自分なりの「問い合わせ」を立てることに関する項目では前回の結果を越えることができなかつた。本研究は児童が主体性を発揮し児童一人一人の読みの確立、そしてそれをより深めようとする資質・能力を育成することを目指しており、この結果は自ら「問い合わせ」を立て探究しようとする児童の育成方法の見直しが急務であることを表している。「問い合わせ」づくりの段階でその方法が分からなかったり、読みの学習と関連付けられなかったりする等、学習過程の中でつまずきを感じている児童が一定数いると予想されることから、「問い合わせ」づくりを行う前段階での指導の工夫や児童に対する支援方法等を検討していく必要がある。

### 5. 今後の研究について

本実践では自身の学びに対する自覚や「問い合わせ」づくりといった個の学びに対する課題が浮き彫りになった。今後は改善が見られた振り返り記述や探究活動等における指導及び支援は継続して行い、一人一人の児童の意識変化について2023年4月と2024年3月の2つの児童意識調査結果から比較検証をしていく。

また、課題が見られた授業方法や学習活動の内容等については誰一人取り残すことのない学び（学習の孤独化に陥らない学び）となっているかという観点で改善を図り、児童一人一人が主体性を持って自身の読みを確立し、それをより深めようとする資質・能力の育成にあたっていく。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたって、授業実践に協力してくださったA県B市立C小学校の2名の先生方に心から感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 国立教育政策研究所, 「令和5年度全国学力・学習状況調査報告書」, pp.8-9, 2023.  
[https://www.nier.go.jp/23\\_chousakekkahoukoku/report/data/23\\_plang\\_02\\_k.pdf](https://www.nier.go.jp/23_chousakekkahoukoku/report/data/23_plang_02_k.pdf) (2024年1月15日閲覧).
- 2) 国立教育政策研究所, 「令和4年度全国学力・学習状況調査報告書」, pp.8-9, 2022.  
[https://www.nier.go.jp/22\\_chousakekkahoukoku/report/data/22\\_plang\\_02.pdf](https://www.nier.go.jp/22_chousakekkahoukoku/report/data/22_plang_02.pdf) (2024年1月15日閲覧).
- 3) 内閣府, 「society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（案）」, p.20, 2022.  
 (2024年1月15日閲覧).  
[https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/saishu\\_print.pdf](https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/saishu_print.pdf)
- 4) 塩家崇生, 「国語科における個別最適な学びと協働的な学びの一体化に向けた一考察—小学校中学年を対象とした文学的文章の学習指導における実践からー」, 『芦屋大学論叢』第80号, 芦屋大学, pp.25-34, 2024.
- 5) 白石範孝, 「対話的な学びに必要な要素は?」, 『汎用的な力をめざす! 対話的で深い学びの授業のつくり方』, 学事出版, pp.12-15, 2017.
- 6) 樋山敏郎, 「2 国語科が目指す「深い学び」と「個別最適な学び」「協働的な学び」」, 『学びの文脈』, 明治図書, pp.36-38, 2022.
- 7) 文部科学省, 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』, pp.36-38, 2017.